**千砂子波止と高燈籠**

19世紀に入ると、御手洗の港町としての優位性は、競合の港の増加によって脅かされるようになった。同時に航路も変化され、かつては関東の南側にあった船が、四国の北岸に沿って港から港へと移動するようになり、北東からではなく、南東から御手洗に接近するようになった。この新しい航路を利用する船を誘致するために、御手洗港の南側に防波堤を設けた。この大規模な工事は、広島藩からの資金調達が度々遅れ、その数年前に合法化された地元の宝くじで資金を調達して、1829年にようやく完成した。

千砂子波止は全長120メートルで、中四国地方最大の防波堤で、当時としては技術的にも高度なものであった。城壁の築城にも使われた「牛蒡積み（ごぼうづみ）」と呼ばれる方法で、大きな石をしっくいを使わずに積み上げている。防波堤の外側には、波の衝撃を和らげるために曲面の壁を設けている。1830年には、御手洗港の繁栄と港を守るために、千砂子波止の守護神として住吉神社が建立された。この防波堤は、多くの台風にも耐え、現在も現役で使用されている。

この防波堤の先端には、御手洗に近づく船を誘導するための灯台がいくつも立っていた。最初の灯台は木造であったが、度重なる暴風雨で大きな被害を受けた。1832年に金子商家の資金で、より頑丈な石造りの灯台が建てられた。この灯台は高さ6メートルで、伝統的な高燈籠を模して建てられた。この高燈籠は1879年まで使用されていたが、住吉神社への参道に移設された。現在は防波堤の先端にコンクリート製の新しい灯台が建っている。これは、元の石造灯台の建築様式を再現して建てられた。

防波堤に並ぶ大きな石は、船を固定するためのもので、漢字の数字が彫られている。防波堤の足元の石には、亀と鶴が彫られている。どちらの動物も繁栄と長寿の象徴であり、御手洗が港町として末永く繁栄してほしいという願いが込められている。これらの石に触れると幸運が訪れると言われている。千砂子波止と高燈籠は、御手洗の港町としての過去と現在を象徴する重要なものであり、江戸時代(1603–1867)の面影を今に伝えている。